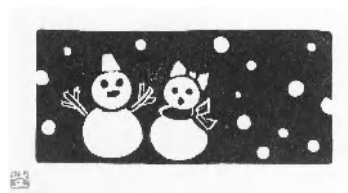


# 貝坂倶楽部

—季刊 2014 新年号 通巻第 27 号—



樋口一葉にゆかりのある平河町一丁目。  
江戸名所図会には「この地は昔から甲州  
街道にしてその路傍にありし一里塚を土人、  
甲斐塚とよびならわせしとなり」とある。貝  
塚であったのが現在定説となっている。



発行 NPO つくしくらぶ

## 目次

寄稿者一行紹介

板東俘虜収容所	藤原 英郎	3
スカートの思い出	関 敦	5
こんな旅行はもう嫌だ～	田村 徹	8
年賀状	高松 良晴	11
これぞアメリカ英語の威力&魅力！！――Part II	小椋 健司	14
English teaching in Japan and my memorable experience	Susan Isetorp	17
新語・流行語大賞：30年のトップ10	森 喬	23
TEA TIME: 七福神		24
KIKU	高松 泰代	26
不治の病	石川 寛	28
最初の言葉	渡辺 成典	31
思いつきで	藤原 昌子	33
サウディアラビア訪問記（1）	藤井 能成	35
「カルテット」とローマの老人ホーム 思い出のイスタンブール	湯沢 雍彦	39

英文ご寄稿については 貝坂倶楽部翻訳  
チームで英語を日本語に意訳いたしました

## 寄稿者一行紹介

藤原 英郎	銀行員、現役時代に英国、スイスに勤務
関 敦	非鉄金属メーカー機械技術者
田村 徹	研究員→国連環境計画局→大学教授→環境コンサルタント
高松 良晴	国鉄マン、鉄道建設改良工事に従事
小椋 健司	英語ガイド、英語通訳(国際会議 他)
Susan Isetorp	在米国、早稲田大学英語教師
森 喬	土木技術者、責任者として、国内外の建設工事従事
高松 泰代	NPOつくしくらぶ 理事長
石川 寛	メーカー勤務、仙台在住
渡辺 成典	民生委員
藤原 昌子	NPOつくしくらぶ 副理事長
藤井 能成	化学系技術者、分離膜研究開発に従事
湯沢 雍彦	お茶の水女子大学名誉教授

－出てみてわかった世界－

## 板東俘虜収容所

藤原 英郎

徳島県鳴門市の中心から西へ小1時間の所に板東という町があり、ここにドイツ人俘虜約 1000 人を収容した板東俘虜収容所があった。収容所跡地は現在ドイツ公園として整備され、その近くに立派なドイツ館が建てられている。また、そこからそれほど遠くない場所に邦画「バルトの楽園」が撮影された際に使われた板東俘虜収容所の入口門やバラック(兵舎)などが残されている。

日本とドイツ帝国は第 1 次世界大戦(1914 年発生)を機に日英同盟により戦争を行った。ドイツ帝国は 19 世紀末に中国政府から膠州湾一帯を租借し、その湾口の青島に要塞を築きドイツ東洋艦隊を配備した。ドイツ帝国の東アジアにおける拠点はこの要塞と南洋諸島(マリアナ諸島、カロリン諸島、マーシャル諸島)であった。日本は海軍を主力としてこの要塞と南洋諸島を攻略した。青島は青島麦酒で名が高く、南洋諸島は戦後国際連盟により日本の信託統治となった。またこの戦争では飛行機が初めて戦力化され、「青島要塞爆撃命令」と題する邦画が、池部良主演で第 2 次世界大戦後制作されている。

ドイツ帝国との戦争において同じく日英同盟により帝国海軍は、巡洋艦明石および駆逐艦 8 隻からなる第二特務艦隊を地中海に派遣した。目的は英仏連合軍の兵員輸送の護衛であった。さらに駆逐艦は増派され合計 18 隻となった。駆逐艦樺はオーストリア・ハンガリー帝国海軍の潜水艦からの攻撃を受け大破し、59 名が戦死した。マルタ共和国旧英国海軍基地にある第二特務艦隊戦没者の墓にまつられているとのことである。

さて板東俘虜収容所であるが、ここに収容されたのは主として青島要塞戦争に参加したドイツ帝国軍の将兵であった。これらの捕虜、当時は俘虜とよばれたが、きわめて丁重に取り扱われたことが有名である。日露戦争でも同様であるが、第 1 次世界大戦でも日本の帝国陸海軍は国際法をよく遵守した。またドイツ帝国軍の将兵はその多くは志願兵であり、東洋各地で活躍していた民間人であり、それぞれに各種の技術を持っていた。ドイツ文化を支えている各種の職人が多かった。収容所では「ディー・バラック」と題する新聞も印刷、発行されており、その一部はドイツ館において展示されている。ハム、ソーセージ、パンなども所内で製造されていた。写真屋も営業していた。彼等の活動は収容所内にとどまらず、地域住民との交流にも及んだ。

このように成功を収めた俘虜収容所であるが、その成果の多くは収容所長

の松江豊寿陸軍中佐(後に大佐)の人柄にあるであろう。収容所を描いた映画「バルトの楽園」でもこの人物は丹念に描かれ、典型的な会津藩士として扱われている。松平健が主演している。

鳴門市では今でも毎年6月に、ベートーヴェンの交響曲第9番が演奏されている。この交響曲がわが国で初めて全曲演奏されたのは、1918年6月1日に板東俘虜収容所バラック第1棟においてであった。演奏はドイツ帝国軍将兵俘虜による管弦楽団であった。映画でもハイライトとなっている。この交響曲はご存じのとおり男女の単独唱と合唱とで構成されているが、男性ばかりの俘虜でどうこなしたのか、とか楽器の不足をどう補ったのか等の工夫、苦心があった。

ドイツ帝国では鉄棒などの器械体操が盛んであったが、板東でも同じだった。テニスコートやサッカー場もあったし、レスリングやボクシングも行われた。収容所内にはボーリング場やビリヤード場も設けられていた。

バームクーヘンなどのユーハイム、ハムやソーセージなどのローマイヤはこれらドイツ帝国の将兵が収容所後、日本に残留してはじめたものである。神戸を中心としてパンや菓子類を販売しているフロイドリーブもそうである。ドイツ・パンは全国的に普及しているが、敷島製パンも同じくドイツ人俘虜がはじめたものである。

鳴門市といえば渦潮がよく知られている。明石市から淡路島を経て四国まで高速道路が貫通していて、鳴門市側の高速道路橋から渦潮を見物できるが、観潮船で見る迫力にはかなわない。四国はお遍路が有名であり、その一番寺が鳴門市にある霊山寺(りょうせんじ)である。現在では88カ所のお寺巡りもバスの利用が多いようだが、昔ながらの装束に杖を使って行くお遍路さんも多い。このお寺は板東俘虜収容所跡の近くにあり、映画の舞台としても使われた。

また収容所とは関係ないが、鳴門市には民間最大の美術館がある。大塚国際美術館という巨大な美術館であるが、その特徴はグループ会社の大塚オーミ陶業(株)が開発した陶板という技術である。これは世界的に著名な絵画や壁画を小さな陶器の板に焼き付け原寸大に組み立てたものである。もちろん全品複製品であるが、こうした手法により、移動できない壁画なども原寸大で再現できる。正面入り口にはミケランジェロ描く巨大なシステーナ礼拝堂が天井画も含めて原寸大で鎮座している。ピカソ描くゲルニカも存在する。ゆっくり見ると1日では足りない。

## スカートの思い出

関 敦

「スカート」の思い出が二つある。といっても、某大学の教授や某署の巡查部長のように、盗撮したという思い出ではない。このことを書こうと思い立ったのは、以前に勤務先の女性に私がスカートをはいた写真を見てもらい笑われなかったこと、そして最近、スキャン機能付きのプリンターを手に入れたからである。生まれて初めてのスカートは、椅子に座ったらお尻が冷たかった。女性がスカートを手で押さえながら座るのは、スカートに皺が出来るのを防ぐためと思っていたが、お尻の冷たさ防止のためかもしれない。



2001年6月に英国エジンバラで同業メーカーとの国際会議があり、家内同伴で出席した。開催の数か月前に主催事務局からの依頼で、手足、胸囲、首や胴のサイズ等身体のサイズをかなり詳細に報告した。エジンバラのホテルに着き、受付の事務局に登録すると早速、スコットランドの正装という「キルト」一式を受け取った。シャツや靴下、蝶ネクタイもあった。ホテルの部屋に入り、早速、試着、サイズはピッタリだが、鏡に写った自分のキルト姿は決してカッコいいものではなかった。写真は翌日の歓迎パーティ前にバグパイプ奏者と一緒に家内と撮ったものである。カッコいいとは思わないが、カッコ悪いというわけでもない。お腹に抱えているものはスポランといい、かなり分厚い皮製なので剣や槍からの防具と思っていたら、ゲール語で財布のこと。

最終日の小生の報告も終わり、午後からスコットランドで初めてのゴルフを体験した。名物となっている海風の強いリンクスコース、ラフの草は伸びっ放しでやたらと深い。コースに平坦なところはなく、急な坂を登ったり下ったり、バッグは車輪つきカートに載せ自分で引っ張るのである。プレイヤー1人に1人の若い男性キャディがついたが、彼の仕事はティーグラウンドで打つ方向を示すことと、ボールを探すだけ。相当に視力がいいらしく、ラフに入ったボールを必ず見つけてくれる。全く、余計なお世話、お蔭でラフからの脱出に3つや4つも余計に叩いてしまった。18ホールを回って疲労困憊、ホテルに戻ってキルトに着替え、休む間なくサヨナラパーティに出席した。

もうひとつの「スカート」の思い出はドイツの「スカート」である。この「スカート; Skat」はドイツで広く楽しまれている「トランプ遊び」の一つ。

1970年5月に西ドイツに出張した時のこと、ひと月前に長男が誕生したのでよく覚えている。デュッセルドルフでの最初の日曜日、同僚のドイツ人がお昼過ぎにホテルまで迎えに来てくれ、小粋なビアホールへ向かった。彼と彼の仲間は毎週日曜日、奥さんと子供達をマリア様が待っている教会へ車で送り届けてから、そのビアホールに集まっている。そこには少々太り気味だが、とても優しくて素敵なマリアさんという女将が待っており、ビールを飲みながら「スカート」に興じるのである。学生時代に「日本学」を研究に来ていたドイツ人から、この「スカート」を教えてもらっていたので、大負けはしなかったはずである。

この「スカート」の語源はイタリア語の Scartare、「伏せて置く」という意味、ルールは殆んど忘れてしまったが、確か、52枚のカードから2から6までのカードを除いた32枚のカードを使う。3人で争うゲームで、初めに各人に10枚のカードを配り、残った二枚のカードをテーブルの上に伏せて置く。そしてゲームの決着がついてから、伏せた二枚のスカートをめくって、勝者の得点が決まるというゲームだったはず。学生時代にはこの遊びを「スカートめくり」と呼んでいた。ドイツでは最もポピュラーな遊びであり、運、戦略、度胸が勝敗を分けるので日本の麻雀に近いのだろう。半世紀も前の学生時代に仲間と一緒に、運を天に任せ、戦略と度胸を駆使して「スカートめくり」に熱中していた。

1970年は大阪万博の年だったが、クラシック音楽ファンにとっても興味深い年だった。ベートーヴェンの生誕200年、そしてニューイヤーコンサートで有名になったウィーン楽友協会・大ホールの竣工100周年という年だった。



小生が西ドイツに出張していた1970年5月に隣国、ウィーン楽友協会・大ホールで記念のコンサートが開催され、先日、そのプログラムのコピーを入手した。記念コンサートの初日は5月24日、カール・ベームの指揮でベートーヴェンのヴァイオリン協

奏曲が演奏されている。一週間後の31日には新鋭・小澤征爾がブラームスの交響曲第二番を振り、6月にはカラヤンがベルリン・フィルを引き連れ、ベートーヴェンの交響曲全曲を演奏していた。

1970年にはワールドカップ・メキシコ大会もあった。準々決勝の西ドイツとイングランドの試合をニュールンベルクのホテルのバーでテレビ観戦した。

延長戦となり、西ドイツがイングランドを制した。その前のイングランド大会(1966年)では両国が決勝で対戦し、延長戦でイングランドが西ドイツを下し優勝していたので、その日の勝利はドイツ国民にはまさに歓喜だった。勝利が決まった真夜中に、屋外で数発の銃声が聞こえた。祝砲のつもりなのだろうが、流れ弾に当たって市民が死亡したという記事を翌朝の新聞で読んだ。

2020年オリンピックの東京開催が決まった。当然ながら、その年はベートーヴェンの生誕250年、ウィーン楽友協会・大ホール竣工150周年の年でもある。7年後のスポーツと音楽の祭典をしっかりと楽しみたいと思っている。

2013-12-24



## こんな旅行はもう嫌だ～

田村 徹

初めて海外旅行をしたのは、1967年僕が29歳の時で、新婚旅行としてサンフランシスコ、ロスアンゼルス、ラスベガス、ハワイの観光旅行を楽しんだ、その時体験したアメリカ文化、文明は実に強烈なものであった。当時、一ドルの交換レートは360円で、記憶は確かでないが、国内からの持ち出し制限が有り、とても外貨が重要な時期であった。この時ヤミ市場での交換レートは一ドル400円で、とても現在のレートからすると随分かけ離れたものでした。

どうしてこんなにしてまでアメリカ旅行にこだわった理由は、僕が中学生であった1952年頃から日本にどんどん入ってきたアメリカ物質文明に甚く感動し是非この目で確かめてみたいと思ったからです。

あれから45年経ち、その間に主にビジネス旅行であったが、欧州の各国、アフリカ大陸、南米大陸、豪州、東南アジア諸国、中国、インドなどを頻繁に訪れる機会に恵まれた。当時は好奇心も旺盛で、体も元気でそれほど長時間のフライトも応えなかったのも、この調子で現役引退後も出来るだけ海外旅行を楽しんで、生涯の海外旅行回数100回以上に挑戦を始めたが、後期高齢者の仲間入りした途端に長時間の夜間フライトに耐えられなくなった。当初の目標達成には後10年くらい頑張らなければ達成されそうにないことが判明し、これではとても快適で楽しい旅行になりそうにないので、この新年にもう海外旅行は卒業しようと妻に提案したところ、私も同感です近くの国内旅行に切り替えましょうと快諾を得た。

日頃から何かと野党的な意見の多い配偶者が僕の考えに何故同意したのかその訳をこれからご紹介します。



2013年のクリスマスに約2週間の予定で、娘の住むシドニーに行ってきましたが、この旅行、何回も行った経験のある我々には手慣れた行先でしたが、残念なことに不注意に起因する失敗と不運の連続でもうこんな海外旅行は嫌だと思ったからです。

まず、いつものように我が家の近くの伊丹空港から関西空港に向かうバスで、切符をかうため、自動販売機に一万円札を投入しましたが、不運にも切符はおろか返金もされず一万円は取られっぱなし。早速係員を呼び機械の内部点検をしてもらっても、この係員機械に不慣れでもたもた、バスの発車時刻も迫って来たので、こちらのTEL番号のメモを渡して2週間の帰国後電話連絡することでその場は決着しましたが、帰国後、連絡したところ、この機械の収支はきちっと合っていますので「当方には間違いが有りません」の一点張りです。

全く返金には応じませんでした。

その時、僕はその機械の売り上げ金額と発券枚数など教えて下さいと言いましたがそれは企業秘密の観点から公表できませんの一点張りでこちらの要求には全く耳を貸しませんでした。そこで僕の提案ですが、ビデオカメラを設置して入金の確認をするなど少なくともダブルチェックが必要ではないでしょうか。

悪いことは続くもので、こんな嫌なめに遭って、今度はオーストラリアに到着して乗継のため自分のスーツケースを移動しているとき、麻薬捜査犬に捕まり大男の警察官に別室に連行されそうになりましたが、僕は絶対の自信があったので、それは嫌だ、今この場で調べてくれと言い、多くの旅行者の通る通路でスーツケースを空ける羽目になりました。

3人の警官と警察犬に取り囲まれ、我々二人が通行人の視線を受けながらの対応は大変恥ずかしいものでした。勿論、捜査結果は問題なしでした。

その原因は、どうも持参した漢方胃腸薬が麻薬の疑いを掛けられたというのが結論です。

悪いことは続くもので、今度はお土産に関西空港の免税店で購入した上質の日本酒がケアンズで国内線に乗り換えるとき件の液体所持品検査で没収されてしまいました。

これに対して、僕はチェックイン後の免税店で購入したもので、何でこんなことになるのか納得できない旨クレームしましたが、その時、実は販売した売店にはシールバッグが用意されているので、そのバッグに入っていて未開封の場合には機内持ち込みできる。あなたはアンラッキーでしたとのコメントでした。せめてこのことを販売者にクレームするときに役立つから写真を撮っても良いと言われ、撮影したのが下の写真です。こんなことが起こるか



も知れないのは、免税店の店員もわかっている筈です、まして、航空チケットの提示も求めてチェック済のことですから、売るだけではなく購入者の立場で判断して売るのが商売のモラルと感じます。

多分、この日本酒は彼らの

クリスマスプレゼントになったのかもしれませんが。

こんな嫌なことが有っても無事シドニーに到着、いつもの様にこの地で便利な公共バスとフェリーの共通の7日間チケットを購入した。3日間は無事使用し、4日目バスの自動検札きに投入しましたが、僕のチケットが戻って来ません、バスドライバーの目の前で投入しましたので、その旨クレームしま

したがこの自動検札器の管轄は自分の責任ではない、あなたの連絡先をメモ書きして渡してくれたら、こちらの担当者から連絡するからと言うことで、その場は無事？解決しました。ところが、その後全く連絡はなくなりました。余り深追いする金額でもないかと自分を納得させ、旅行続行することになりました。

シドニーは湾に面して美しい街が広がっていますので、毎回こちらに来ると海辺のトレッキングを楽しんでいます。非常に美しく整備されたコースには無料のシャワー、トイレが整備されているので快適なウォークが出来ます。

写真2はオペラハウス、ハーバーブリッジを対岸から遠望したのですが、海を隔てて見る風景にはいつも感動します。そんな楽しいハイキングの途中、妻が芝生の綺麗な広場で写真撮影のため後退したところ、芝生に覆われた窪みに足を取られ転倒、暫く痛みのため立ち上がれず。

幸い、5分後何とか自力で立ち上がりウォーキング再開、しかし、帰国後痛みがひどくなり通院する羽目にやっぱりこの旅行は憑いていない。

いよいよ帰国の日、定刻遅れ常習犯のJ S航空、いつになく定刻に飛行機のドアが締まり、離陸体制にとその時、エンジントラブルが発生し引き返しますとのアナウンスが有り、また、空港待合室に引き帰り3時間待たされることになりました。嗚呼なんてこの旅行はこうもトラブルが続くのかと半ば諦めながら、無事帰国できればそれで良いと自分を納得させました。

その甲斐が有って、3時間遅れで無事関西空港に着陸、それ急げとばかりに空港リムジンバスの乗り場に急ぎましたがバスは3分前に出発したところ、止むを得ず他のルートで帰ることになり、我が家に着いたのは日付けの変わる寸前でした。

今回はあれやこれやと大変な旅行でしたが、この他にもここ数年、夜間のフライトが体力的に大変つらく、機内食には全く食指が動かず。パスを繰り返し、現地に着いてから体調回復まで3日間くらい要するなど旅の効率も低下してきました。

これは神のお告げと理解して、今回で海外旅行の目標であった100回の達成は諦めることにしました。

幸い、PCで世界のどこの情報でも瞬時に入手できる時代に生きていますので、これからはプロの撮影者、レポートの報告を自宅で寝っころがって楽しみたいと考えています。

## 年賀状

高松 良晴

赤い郵便ポストに、1週間がかりで書きあげた約700枚の年賀状を小さな束に分け、ひとつ一つ差し込む。ことん、ことん、との音がかえってきた。

昨年もそうだったが、今年も、「古希もとうに過ぎ年金生活の身、もう、体力的にも金銭的にも、これが最後かな」との思いがよぎる。

送り先の大半は、仕事でご一緒させていただいた方がほとんどだ。

昨年いただいた年賀状を取出し、一枚一枚、あらためて拝見する。宛名書きを自動印刷するパソコンソフトはある。だが、私は、手書きで宛名を書く。水彩太めの滑らかなボールペンで宛名を書いていると、その方との出会いが思い出される。久しぶりの再会、との気分になる。

そして、通信欄の印字された「謹賀新年」と「当方の住所氏名」との間の白地に、拙い自筆での数行を必ず書き添えることとしている。

大学4年の秋だった。卒業論文ご指導の先生から、「そろそろ就職先を決めないと行くところなくいなるぞ」と言われた。国家公務員試験は受かったものの順位は下のほうだった。これでは、ずっと一生、特定の地方建設局管内に閉じ込められそうだ。やはり、日本全国動きまわられる仕事がしたかった。さりとて建設会社で、がんがんとやれるだけの気力、勇気に自信はなかった。そこで、春に一度は不合格となった日本国有鉄道を再度受験した。試験官から、「君、今回もまた、学科試験の成績悪いね、それに、鉄道建設の仕事は東海道新幹線で終わり、もうないよ」と言われた。だが、「捲土重来の思いで受験させていただきました。もう、他に行くところもないので、よろしく願いします」と答えたら、どうゆうわけか採ってくれた。選挙に例えれば、非公認候補が当選したようなものだった。

それから40数年間、望み通り、北海道から九州までの転勤、転勤の、“ぼっぼや”人生を過ごすこととなった。だが、それは、自分自身の怪我での入院からはじまり、架設中の橋桁の落橋、トンネル掘削工事の難航、豪雨による土石流災害、上信越での豪雪、工事中の死亡事故、シールドトンネル工事中の道路陥没、工事費の度重なる増額、工期延伸、建設反対の住民運動との対峙、労働組合との交渉、贈収賄事件、工事完成後の剥落漏水等、相次ぐトラブル・事故との遭遇でもあった。

そこに、多くの方々との出会いがあった。不器用で融通の効かぬ我が身は、どこの現場でも、失敗を繰り返しながらの試行錯誤で対応するしかなかった。それでも、なかなかうまくいかない。それを見て、皆さん、見るに見かねて

であろう、手を差し伸べてくださった。そのお蔭で、忘れ得ぬ方々のお顔が  
どんどん増えて行った。

最初の現場で一緒させていただいた方との年賀状のやりとりは 40 年余  
り続いており、最後の現場の方とでも 10 数年は続いている。

年賀状の添え書きは、まさに、戦友との年に一度の会話である。

それだけに、どうしても、まずは、当時の事故、トラブルにまつわる話が  
多くなる。だが、次第に毎年同じ内容の添え書きとはならず、そのうち、お  
互いに近況や心境などを交わすようになってくる。

年賀状 10 年続けばお友達である。添え書きの余韻に浸りながら、末尾に「お  
元気で！」と書く。

年賀状の良さは、特段の用件がなくても、どなたにも出せ、受け取って  
いただけることにある。1 枚 50 円の年賀はがき、生存通知だけでは勿体ない。  
普通はがき同様、意思伝達の手段として使うことだ。

気が付けば、年上の方とやりとりが少なくなっている。毎年、私が歳を重  
ねると同時に、相手の方も同様に歳を重ねてきておられる。

数年前、私自身が古希を過ぎたころから、年の暮れ近くになると、奥さん  
から「夫が…」、息子さんもしくは娘さんから「父が…」、との喪中はがきの  
到来が多くなってきた。寂しいかぎりだ。

一方、若い世代との年賀状のやりとりは増えることもない。

総じて、我が交流の範囲が、じわじわと狭まれて来ている。だが、これば  
かりは、生きとし生きるもの、だれしも、変えられない。

「…、それが人生さ、…」と、よくフランス人は言う。

NHK スペシャルドラマ、「坂の上の雲」(原作・司馬遼太郎)は、明治の初  
め、ともに伊予松山で生まれ育った 3 人、秋山好古(陸軍)、秋山真之(海軍)  
兄弟と正岡子規(俳人)とが、小さな国が開化期を迎える中、坂の上の青空  
に浮かぶ一条の雲を目指して生きる姿を描いている。その一つの場面で、病  
床に伏しながらも俳句の新しい境地を開いて行った正岡子規が、欧米海軍を  
見て帰って来た海軍士官秋山真之(幼名・淳五郎)に、「淳さんの世界は広い。  
だが、子規の世界は狭いが深い」と語っている。詩・俳句は、情感と表現の  
世界、手紙のやりとりにも通じるものがある。

年齢的には、いつ何時、人生ノーサイドの笛が鳴ってもおかしくない我が  
身、人生たった一度、たとえ、人との付き合いの範囲が狭くならうとも、子  
規同様に、現在生きている世界で深みを増すことこそが大事。そう考えると、  
また来年の暮れにも、是非年賀状を書かねば、と思うようになる。

そうは言っても、700 枚ものの年賀状に、全ての 1 枚 1 枚に、宛名、コメ

ント数行を書き添えるのには、それなりの体力と根気が要る。

1枚書いては、後何枚との思いでの積み重ねて行く作業の連続だ。

ちょうど、市民マラソンで、ゴールを目指し、途中で止まるものかと、一歩一歩足を踏みだしながら、ゆっくりゆっくり走るのと同じ。

70歳代半ばの今年まで、年賀状を書き続けて来られたのもそれなりの体力が維持されてきたから出来たこと。私の場合には、熟年になって始めたランニングに負うところが多い。

還暦、60歳の頃だった。腰痛で歩けなくなり、手術の後、3週間ほど病院ベッドで固定された結果、足の筋肉はすっかり落ち、痛みはなくなったものの全く歩けなくなっていた。杖をついてのリハビリを数か月続け歩けるようにはなったが、このまま、年老いたたらどうなることか、との思いを味わった。いつまでもお元気だった小学校担任の先生の「足は第二の心臓だよ」との言葉が思い出されもした。

だいぶ歩けるようになった頃、職場の方に誘われ、皇居の周りを走りはじめた。それが、いつしか市民マラソン大会に参加するようになり、大会参加のための日々のジョギングが、体力の維持のみならず、心をも晴れやかにしてくれた。

さあ、年賀状は出した、次は、来年1月、参加予定の鹿児島指宿でのマラソン大会へ向けて、トレーニングせねば、と思う。

いつものように、今日も、都心の歩道を、ゆっくりゆっくりだが、走ろう、と立ち上がった。すると、カミさんから、「父さん、本当に、今元気、よく続く、それって、きっと、いつも練習しているからなの？」の一言。

オリンピック銀・銅メダルの有森裕子選手の「練習は嘘をつかない」との言葉を思い出し、運動靴を下駄箱から取り出し、私は、そのまま外へと一歩踏み出した。

(2013年12月27日記)

## これぞアメリカ口語の威力&魅力！！—Part II

——オモシロクモナントモナイ？・・・ナントモオモシロイ！——

小椋 健司

さて、今回も調子に乗り (push my back)、ここに第二弾を掲載させて頂く運びとなった。さて今回は、どのようなものを書こうかと、そのことばかりを考え (have it on the brain)、知恵をふりしぼった結果 (after beating my brains)、以前から感じていた「英米人の笑い vs.日本人の笑い」、その性質の違いについて述べさせて頂くことに決めた。

かなり前のことになるが、エリザベス・モンゴメリー主演の、『奥様は魔女』が再放送されていた時があった。今となっては記憶も定かではないが、おおよそ次のような一場面があった。—エンドラ (主役のサマンサ奥様の母) が、建設中のあるビルの中へ足を踏み入れると、そこでは2、3人の工事関係者が何やら話をしている。するとその時、彼女の存在に気づいた一人が、少々荒っぽい語気で一言。「・・・ここには入っちゃダメだよ、オバサン。帰んな！」すると、エンドラは彼等に息をふきかけ、大の男どもをいとも簡単に吹き飛ばしてしまう！ここで「客」の笑いが聞こえてくる—さて、ここで問題となるのがこの笑い。一般的に考えて、日本人がこの場面を見て笑うとすれば、エンドラが男どもを吹き飛ばしたという事実、あるいは、その結果、ナサケナイ姿となった男どもに対してオカシサを感じるためと言えよう。しかし、ここでのアメリカ人 (もちろんイギリス人なども例外ではないが。) の笑いには、もう一つの理由がある。それは、画面から受けるオカシサと同時に、巧みな洒落からくる「知的面白さ」なのである。つまり、彼等の場合は「ダブルの笑い」なのである。—エンドラへの捨てゼリフ「帰れ！」は、この場面では皮肉っぽく、“・・・Please *blow!*” などと叫ばれていた・・・これぞ正に、英語ならではのジョークといった感じである・・・

日本語放送で英米のコメディ番組をみていて、オモシロクモナントモナイ会話の場面で、“ナントモオモシロイ” とばかりに笑いが聞こえてきたとすれば、それは、英語特有のシャレ、あるいはジョークのためだと判断してまず間違いないだろう。

以前私が買ったロックン・ロールのアルバムの中に、実に巧みなシャレを取り入れた歌があった。‘have ants in one’s pants’とは、「モジモジする」というアメリカ俗語だが、その歌の中では、‘ants’が‘dance’に変えられ、この言回しが実にウマく使われている。歌は、ダンスは苦手という男が、ダンスはプロ級という女にフロアーに引っぱり出され、最後には踊らずにはいられないほどになり、2人して踊り狂うという、その名もスサマジイ、『死ぬまでロックンロール・ダンス』(‘DANCE IN MY PANTS’) という豪快・ゴキゲンな

ナンバー。歌の途中では、女が男を「口説く」 (!! ) セリフや彼女の高らかな笑い声、加えて、男の「嘆き」なども聞かれ、ナントモ言えない・・・ (Nice isn't the word!) そもそも、このアルバムの題名自体がシャレていて、これにはさすが、ウナってしまった。--'BAD FOR GOOD' (「永遠の悪を生きる」) アルバムの邦題は、『楽園への翼』。アーティストはジム・スタインマン。

さて、今回もワルノリして (overdo it)、いくつかジョークを挙げてみたいが、決して、テングになって (get a big head) 見せびらかす (show off) という心境ではなく、あくまでも、文字どおり“しゃれ”のつもり (just for fun) なので、軽く読み流して頂きたい。ついでながら、以下のジョークは、機械的に日本語に訳してしまえばオモシロクモナントモナイものばかりである。(ジョークそのものの自体が、オモシロクモナントモなかつたりして!)

☆ ☆ ☆ ☆

- ◎ 'Practice makes perfect frustration!'  
「習うより慣れろ」ではなく「習うよりツカれる」とでも言おうか??
- ◎ 'Boys, be ambiguous... Woops! *AMBITIOUS*, I mean.'  
誠にクダラナイ (ain't worth a hoot) ジョークだが、一応、参考のため...
- ◎ 'It's no funny, no fun, nothing!'  
これぞ「オモシロクモナントモナイ」にピッタリのナントモオモシロイ表現! リズミックにもオモシロイ。'not interesting' では、それこそオモシロクモナントモナイ。
- ◎ 'Knowing the name of the game is exactly the name of the game!'  
'the name of the game'とは、「大切なこと」の意。「鬼ごっこ」、「かくれんぼ」などの呼び名を教える際に使ってみると面白いだろう。
- ◎ 'I'm fine, as fine as it is in your country!'  
暑い地方からの人たちのツアーの際にウケそうなセリフ。
- ◎ 'I'm afraid I don't get good vibes from this bus!'  
これぞ窮地を救ってくれるであろう言回し! ...もしも、バスの中で急な激しい揺れに足もとを奪われ、危うく転倒してしまいそうになったり、あるいは、不幸にも犠牲者となってしまった場合、まるで何事もなかったかのようにサラリと一言。特にアメリカ人な



どには面白がってもらえるだろう。‘get good vibes from ～’とは、「～と波長が合う」という意味で、‘vibes’は、アメリカ俗語で、「感じ・雰囲気・居心地」などの、‘vibrations’である。バスの「揺れ」を意識してのジョーク。

英語特有の言回しを自由に使いこなし、ネイティブに近い会話をめざすことは確かに容易なことではないかもしれない。しかし、それだからこそまた面白く、やり甲斐もあるのではないだろうか？  
ANYWAY, IT'S WORTH A TRY....



前号（季刊誌秋号）「これぞアメリカ口語の威力&魅力—Part 1」の以下の箇所を訂正させていただきます。

P. 23	2行目	つい先日	→	<b>1988年</b>
	9行目	Won't	→	<b>won't</b>
	下から12行目	Though!	→	<b>though!</b>
	下から10行目	モーニング？	→	<b>モーニング・</b>
P. 24	15行目	日の目を見る	→	<b>日の目を見ぬ</b>
	下から17行目	グローイン・	→	<b>グローイング・</b>
	下から13行目	—I'm 28 years old	<u>NOW!</u>	→ <b>削除</b>
	下から12行目	Harajuku	→	<b>Harajuku</b>
	下から7行目	shot	→	<b>shot(オオモノ)</b>

## ENGLISH TEACHING IN JAPAN AND MY MEMORABLE EXPERIENCE

Susan Isetorp

In the Japanese formal education system, students study English in junior high school and high school, and the vast majority continue studying at the university level. Traditionally, the emphasis has been on grammar, rote memory memorization, reading and writing in order to prepare students to pass various entrance examinations. As a result, there are some students who would be classified as false beginners, namely those have studied English but are able to communicate at little more than a rudimentary level. Although the recent trend in English education focuses more on the communicative approach, there is still more on the part of the Mombusho, teachers and parents to address conversational skills.

While living in Japan from 1971 to 1998, I was fortunate to be able to teach English as a Second Language in a junior college, universities (including adult education classes), companies and to private students. A particularly memorable experience was working with a visually impaired friend, Seiko Shimoguchi, for two years to prepare her for taking the TOEFL test as a prerequisite for library science graduate study in the U.S. which she successfully completed at UC Berkeley in California.

*A photo of Seiko Shimoguchi with her guidedog, "Charlie" which was taken August 27, 2007.*



*A luncheon party with Hiroyuki Koyama, a former student of mine who was a Nikkei newspaper reporter and professor. The photo was taken with his family at their home in Yokohama in June of 2009.*

I spent a great deal of time initially looking at, comparing and evaluating textbooks for particular classes. Additionally, when possible, I introduced a variety of other courses-ones using newspaper and magazine articles or related to literature, music, speech making and comparison of cultures. I used many different props such as photographs and menus from various kinds of restaurants to stimulate effective conversation and lively discussions. At a junior college and university in several classes, a favorite project of the students was to learn how to read, write and present recipes. To this day, I treasure the beautiful books with illustrated recipes that the students made. Many ideas for class activities came from a book that five women and I wrote in 1975 called *"English Without Anguish"*, which was later revised in 1992. This worthwhile project was promoted by The College Women's Association of Japan.



*A photo of Mr. Ishii and other students. It was a reunion luncheon party with former "Open College " Waseda University students at the Royal Rhiga Hotel on October 26, 2012.*



*A photo of the reunion luncheon party with former "Open College" Waseda University students which was taken at the Imperial Hotel on June 4, 2009.*

A prime goal of mine in teaching English was to provide ample time for interaction of students with each other by working in pairs, interviewing each other and participating in small group work and discussions. The more I taught, the more I also understood what the psychological aspects of learning English were for Japanese students. It is highly important for them to feel comfortable with their teachers. I spent a lot of time encouraging my students, praising them and developing their confidence and trust. Initially, many of them were shy and reticent to participate. I think this was linked to the belief that whatever they tried to say or communicate had to be perfectly done. Often I advised students that even though it was difficult to begin to swim in a pool, it was best to just dive in and DO IT, and the practice, improvement and enjoyment would soon evolve. By applying this same technique to English study and communication, they would see a similar pattern. I also felt the importance of my students learning to express their own ideas and opinions – particularly businesswomen and businessmen. This skill was of utmost importance if they traveled overseas and attended business meetings or conferences where they were expected to communicate and participate a great deal.

Although I haven't been involved in English teaching in Japan since 1998 when I moved back to California, I have noticed some positive trends in the past few years. First, there seems to be even more emphasis on conversational English – even in the entrance exams. Secondly, more and more children are starting to learn and speak English at an earlier age. It is a perfect opportunity, since for the most part they are less shy, inhibited and prone to perfection. When I lived in Japan, it was common knowledge that the foreign children's ability and help with Japanese was a great help to their struggling parents! There also seem to be more exchange programs overseas now for students to study and use English by living with families and/or attending schools and other institutions. Finally, I have noted that there are stricter requirements for foreign people and teachers to teach English in Japan. For the most part, they must have a Masters degree in TESEL and

solid experience as well. The competency and quality of these teachers will surely be great assets for Japanese students. All of these changes and more upcoming ones in the future will definitely promote *“English without Anguish”!*

November 17, 2013



## 日本で英語を教えた日々

Susan Isetorp

日本では中学高校で英語が学ばれ、大学でも続けられます日本での英語学習とは伝統的に文法、記憶、読み書きに重点が置かれているのですが、それは大学入試対策が主目的だからです。その結果、学生の中には疑似英語初級と分類されるものがいます。英語は学習したのですが、ごく初歩に近いほどの会話力しかないと思われる学生たちです。昨今英語教育は会話重視の方向になってきていますが、今文部省が教師学生の会話技術に関して求められていることが多いと言えます。

1971年から1998年までの日本滞在の間、幸いなことに第二外国語として英語を教える機会がありました。中学、成人教育を含めた大学、企業や個人レッスン。特に印象深いことですが、目の不自由な友 Shimoguchi Seiko さんとのレッスンです。彼女は米国で図書館学修士のための準備をしていましたが、TOFELの準備が必要でした。二年彼女とレッスンをしました。その後彼女は見事にカリフォルニア UC バークレイで学業を終了されたのです。

*Shimoguchi Seiko と介助犬 Charlie の写真。2007年八月撮影*



*生徒の一人 Hiroyuki Koyama 宅での昼食会。彼は日経新聞の記者であり大学教授。2009年六月横浜のご自宅で撮影*



レッスンにあたって、様々な準備をいたしました。教材をよく読み、比較しそして評価して吟味するのに時間をかけました。

また他にできるだけ、様々なレッスン方法を導入いたしました。新聞、雑誌の記事、又文学、音楽、スピーチの方法、更に比較文学などをつかってみました。写真、いろいろなレストランのメニューなどもつけてみました。会話の上達、活発な会話に効果的でした。短大、大学のクラスで、学生に人気のあったものは料理のメニューを読み、書き、そして実際に紹介することでした。今も私は学生が作ってくれたイラスト入りのレシピの美しい本を大切にしています。1975年に5人の婦人と私とが書きました ‘苦労しない英語’には英語クラス活動についての多くのアイデアが入っています。



石井氏他生徒の写真。 2012年10月26日リーガロイヤルホテルで、元早稲田大学オープンカレッジの方々とのリユニオン昼食会です。



元早稲田大学学生のリユニオン昼食会で、2009年六月四日帝国ホテルで撮影された写真。

最良の英語の教える方法は 生徒同士で十分に意思疎通を取ることだと私は思っていました。2人がペアになり、お互いにインタビューしたり、小さなグループ

ワークや討論をする。教えれば教えるほど、日本人の学生にとって、英語を学ぶことについての心理的な面を理解するようになりました。もっとも重要なことは先生とリラックスした気分でいられることだと思いました。それでできるだけ生徒を励ました、褒めて生徒が自信と確信をもつように。生徒は最初、引っ込み思案で、話したがりがありませんでした。それは何を言うにしても会話するにしてもすべてが完璧であろうとすることと深く関わっていると思います。よく生徒に言いました。プールで最初泳ぐときは難しいものです、しかしとにかく飛び込む、行動することが一番良いのです、そうすれば練習でき、上達し、楽しむということになっていくのです。このことを英語の学習や会話に応用すれば、同じ結果となる。生徒が自分の考え意見を言うように学ぶことが重要だと思いました。とくにビジネスをする人たちが。これは特に海外へ旅をしたり、ビジネス会議に参加するときに非常に重要です。会話をし、相互理解に参加することは必須とされる機会だからです。

カルフォルニアに1998年帰ってきて以来、英語を教えることにかかわってきておりませんが、最近望ましい傾向がでてきていることに気が付いています。一つに英語での会話に重点がおかれてきている、入試においても。次に子どもたちが小さいころから英語を学び話し始めている。子供のころというのは、もっとも望ましい時期で、子どもはまだ引っ込み思案でもなく完璧主義の傾向も少ないのですから。日本に住んでいるころ、日本の生活の中で奮闘している親たちにとって、子供たちが日本語ができることがどんなに助けであったかということは、よく言われていたことです。今は以前よりもっと学生が交換学生として外国に行くプログラムも増え、家族と住んだり、学校など様々な機会に英語を使うことも多くなっています。更に日本で英語を教える外人や英語の先生には以前よりも厳しい資格が求められていることも知りました。TESEL 修士の資格が必要であり、しっかりした経験も求められている。先生たちの適正と能力は当然日本人の生徒にとっては、素晴らしい宝物となるわけですから。このような変化、そしてさらなることがらは 更に' 困らない英語 ' となっていくと確信しております。

2013年11月17日



## 新語・流行語大賞:30年のトップ10

森 喬

### 1985 年キャバクラ

当時、繁華街の新しいビジネスとして注目され、今でも広く使われている。

### 1986 年亭主元気で留守がいい

今や流行語の域を超えている。

### 1989 年セクシャル・ハラスメント

差別用語を頻発のオヤジが鬻ぎを買って時代となり冗談も通じなくなった。

### 1990 年オヤジギャル

週刊誌SPA に連載されていた中尊寺ゆつ子のマンガ『スイート・スポット』からきた言葉で、年は若いがおヤジのような行動をする女性（ギャル）のことである

### 1993 年サポーター

Jリーグ発足で熱心なファン層ができた。

### 1994 年同情するならカネをくれ

民放の人気ドラマ「家なき子」で子役の安達由実のせりふで話題となった。

### 1995 年安全神話

今では原発問題で再復活。

### 同 がんばろうKOBÉ

神戸大地震で全国的な声援に、東北大地震や今年の伊豆大島水害でも。

### 1996 年自分で自分をほめたい

92年バルセロナ五輪で銀、96年アトランタ五輪で銅メダルのマラソン選手有森裕子の言

### 2006 年格差社会

富裕層と貧困層に二極化した社会を指す。具体的には、経済格差・所得格差・情報格差などにより中流社会が損なわれた状態を指す。格差を示す指標。

過去29年間で受賞した337語のうち、現在まで継続して使用されるなどの条件にあった99語を候補とし、読者300人にアンケート調査を行った。担当者は「日本に活力がある時代には、印象に残る力強い言葉が多い。

### 流行語大賞2013 の年間大賞は

「今でしょ」「じえじえじえ」「倍返し」「お・も・て・な・し（おもてなし）」

いやあ～4語が年間大賞になるとは！



## TEA TIME



### \*\*\* 七福神 \*\*\*

七福神（しちふくじん）とは、あらゆるものに福をもたらすとして日本で信仰されている恵比寿、大黒天、毘沙門天、弁才天、福祿寿、寿老人、布袋の七柱の神であります。仏教經典の「七難即滅七福即生」から七柱の神になったともいわれます。ありとあらゆる幸運をもたらしてくれる七福神は、室町時代ごろから 幸運、福運、とくに金運をさずけてくださる七神としてまとめて信仰されるようになりました。インド・中国・日本の神様がご一緒にうちそろって宝船に乗り幸運を運んでくるといわれています。

#### 恵比寿（日本の土着信仰）

大国主命の御子と伝えられていて、「大漁追福」や「商売繁盛」や「五穀豊穰」をもたらす、漁業や商業や農業の神様です。智恵を働かせ体に汗を流して働けばこの神が福財を授けるという信仰の神様です。

神無月に出雲に集まる神々の中で、この恵比寿様だけが留守神として各地に残ってくれることからその時期に「えびす講」としておまつりすると言われていいます。

#### 大黒天（インドのヒンドゥー教）

インドのシヴァ神と日本の大国主命の神仏習合の神様です。有福・食物・財福・出世のご利益があるとされています。

印度の神様で仏教の守護神ですが、日本では有福・福德を示し商売繁盛の守り

神、台所や田の神としても有名です。

### **毘沙門天**（インドのヒンドゥー教）

インドのクーベラ神で、四天王の一人多聞天とも言われ、日本では毘沙門天と呼ばれています。

宝塔とやりを持ち悪霊を退散させ財宝をさずけるといわれ、戦いの神・鎮護国家の神と信仰され福を与える神様です。毘沙門天を信仰すると十種の福を得るとされ、その中には無尽の福・長命の福・勝軍の福・愛敬の福などがあります。

### **弁才天/弁財天**（インドのヒンドゥー教）

美と智慧と音楽・財運と弁舌と芸術の神と知られ、七福神の中の紅一点の女神です。インドの神話で「サラスヴァティー神」と呼ばれ、蛇を従え財や富をもたらす女神とされています。上野不忍池、近江の竹生島、安芸の巖島、江ノ島の弁財天など有名ですが、すべて「水」にかかわりのある場所に建てられています。

### **福祿寿**（中国の道教）

頭長の福祿寿は道教の神様で、一羽の白鶴を伴う、南極星の化身だとも言われています。福德・人徳・長寿の神様です。

### **寿老人**（中国の道教）

白ひげの寿老人は、三千年の長寿を保つ玄鹿をしたがえ人々の難を祓う杖を持つ、天南星または寿星の化身だといわれます。健康、長寿、幸福の神様です。

### **布袋**（中国の仏教）

唐の時代に実在したといわれる仏教の僧や弥勒菩薩の化身だといわれます。開運・良縁・子宝の神様です。

## KIKU

高松 泰代

きっと多忙な日々だったのだろう。16か月もの日々、まして12歳、13歳の年頃なのだから。父の転勤で東京から名古屋に引っ越し。中学生生活が始まった。私立の女学生となり、セーラー制服を着て、市電で通学する。小学校の友達がいることなどありえないわけで、360度見回しても、歩いて市電に乗っても、見知らぬ土地と人ばかり。考えると大変な人生激変の日々の真ただ中にいたことになる。語りつくせないほど劇的な思い出があつて当たり前だったはず。

それが、住んでいた家までおぼろげで、玄関までの小さな庭に、白い花が咲いていたのだけが今も目に鮮やか一だけが思いだすこととは！ 家族は何をしていたのか？ 父母は？ 二人の弟たちは？

青柳という駅から市電に乗る。座った覚えはないけれど、金城学院前まで長かったはず。電車の中で本を読んでいた記憶は全くない。かなり鮮明な記憶は校舎に入る門に立ったときのこと。上級生が制服のチェックをするのが、異次元の世界をみているようで今も奇妙な光景だと思う。制服のスカートの幅が細くなっていないか。上着の白いスカーフをふわっとかぶせ、根本で小さく結べているか。そういえば、プリーツのスカートは每晚布団の下に敷いて、翌日折り目がちゃんとあるようにするのだった。替えの制服があつたのだろうか？ 無かつたような。布団の下にスカートを敷いたのではかなり汚れたのではないか。昔は街にでると、いろいろな臭いがいっぱいだった。家の中も同じく、我が家らしい臭いがしていたのだろう。父と弟二人の男と母私お手伝いの女がいて、たぶん犬や猫もいたような気がするから。

かすかな記憶の中に教室の風景がある。目が悪かつたので、背は高かつたけれど、一番前の席。声が極端に小さかつたので、返事をする先生が机のそばまでいらした。友達が三人ほどいたような覚えがあるけれど、名前は覚えていない。ある時音楽の先生に呼ばれて、ピアノのそばにたつと、先生が‘小野さん、将来音楽学校へいきませんか？ 声楽を。’帰宅して、父にその話をする‘やめなさい、音楽をするのに生活力のある男はいないから’なるほど！ とすぐ納得して、記憶にないけれど先生にそのままお返事したのだろうと思う。先生と言えば、ひとりだけ顔を覚えている。習字の先生。夏休みの宿題があつた。どうせ上手に書けるはずはないので、手本を紙の下に置いて一回なぞり、それを提出した。休みが終わって、習字の時間。提出したものに採点していた先生が私をじろつとみて、言い放つた。‘小野さん、練習しないで、努力しないで、なぞった字は、すぐにわかるんですよ’。なぜわざわざそんなことを大きな声でおっしゃるのかがとても不思議だった。

努力や練習と言えば、中学になってみると、よくテストというのがあつた。試験やテストというのは、今の自分がどんなことを知っている、わかっているのかを書くクイズみたいで、面白いだろうと思った。(試験がある前は、覚えたりする努力が必要だったのだろうと知つたけれど、それはずっとずっと後になってからのことだった。)授業の時間は他にすることないので、ヒマだから、先生の話聞いていたのだけれど、試験用紙をみると、聞いていたことを書くようになっていた。聞いたことのないことを書くことなどなかつたか

ら、全く面白くないのが試験で、問題と称するものに、当然の答と称することを書けば、時間はすぐ終わる。後に先生が用紙を返してくれるときに‘ほとんど全部答があつてますよ’と言われるのだけれど、自分で話しておいてそれを生徒が書いたら同じことが書いてあるのは当たり前のことだから、変な先生たちだと思った。

中学の二学期の終わり、父が大阪に転勤となった。膨大な本をもっていた父なので引っ越しはトラックが荷物で一杯。その中に犬が木枠に入れられて運ばれていったのが、なぜかとても切なかつた。伊丹というところに住むことになった。ある日母が電車を乗り継いで学校へ連れていってくれた。玄関が高い校舎のある一部屋に入ると、サンタクロースさんだとも思ったけれど、中学の校長先生だったという先生が満面の笑みで迎えてくれた。ゆったりした椅子に座った。先生が‘これは素晴らしい成績ですね。明日から早速登校を’ということで、気が付くとある教室で転校生だと紹介され、心地よい笑顔の人たちの中で椅子に座っていた。古いけれど、光のたくさん入る、空気のゆったりした教室と学校が私にはとても心地よく思えた。自分の中で何かが変わってきた一と思いながら、中学最後の日々が始まった。

最近気が付きました。 聞く・聴くということが私の勉強方法だったと。日々過ごすとき、どこにいても 貪るように聞いて、聴いて、そしてまた同時に自分に聞き続けた。若いころおしゃべりでなかつたのは、世の中を聞き、自分にきいているだけで十二分に満足であったし、充実していたからだったのだらうと思います。 恵まれていたことは、非常にたくさんの濃い話しをきく環境にあったことだらうと思ひ感謝します。



考えれば人間が 聞くことから読むことを優先するようになったのは、まだ最近のこと。いまでも文字を読めないひとたちは世界に非常に多い。 縄文館、歴史博物館の縄文時代をたずねる度に思います。生き物にとって 聞く、聴くことは生死にかかわることだった。襲ってくる動物、自然災害などはから生き延びるためには、五感全部で聞いていなければならない。そう KIKU ということは、生き物にとって五感、全身の研ぎ澄まされた必須の感覚動作なのです。思うのです、津波もみんなが聴いていたら逃げられたのでは、見ていたから逃げ遅れた。

**KIKUの日本語の書き言葉は多々あります。 聞く、聴く、効く、訊く、利く、そして菊。**この頃人は よく読み、よく話す。そして話していても、聞いていないのではとよく思います。自分の話していることさえも自分で聞いていない。 読んでいられるけれど、実感として五感に入ってくるように読んでいないような気がしてならないのです。

## 不治の病

石川 寛

筋萎縮性側索硬化症という病気がある。運動神経が侵され全身の筋肉が衰える病で、徐々に体の自由が利かなくなる。筋肉のあるところはどこかまわらず動かなくなってしまう。手足はもちろん、ものを食べることも飲み込むことも、話すこともできなくなる。そして遂には呼吸ができなくなり死んでしまうという。脳には筋肉がないので、萎縮せず、意識は最後まではっきりしているらしい。

日本では毎年十万人に一人くらいの割合で発病している。多くは発病後数年で死亡するため、生存者は少なく、患者数は約八千五百人位という。生存する患者数が少ないことがネックになり、この病気に関する研究が進まぬらしい。今のところ、治療方法はなく、病気の原因すらわかっていない。進行を遅らせる薬を飲むことが唯一の治療である。一種の不治の病と言ってよいであろう。

生存している有名人ではイギリスの物理学者ホーキング博士がいる。彼は発病後五十年経っても生きている稀な例である。また、日本のテレビのクイズ番組に出ていた篠沢秀夫教授もその一人である。徳洲会病院の創設者徳田虎雄氏もそうである。

病没者では、アメリカのプロ野球選手で鉄人と言われたルー・ゲーリックが有名である。したがって、この病気をアメリカではルー・ゲーリック病という。中国の毛沢東もまたこの病であった。

何故、こんな病のことを書いているのか、と疑問に思うかもしれない。じつは、私もこの病に罹っていることを九月下旬に宣告された。医者はこの病名を告げられても、初めて聞く病名なので、どういう病気か理解できなかった。医者の説明と聞いているうちに、何とも厄介なことになったものだ、と思った。

私の場合、平成二十四年夏に、右手の甲が痛みだしたのが発端のようである。当時は湿布薬を貼ってみたがすぐにはよくなる。利き手の右手に湿布薬や包帯があると何かとは邪魔なものである。我慢できないほどの痛みでもないので湿布をやめた。そのうち、痛み慣れてしまい、気にならなくなった。

そのあと、食事の時に箸が使いづらくなってきた。大きめの煮物などを箸で

挟んで持ち上げることができず、刺してしまうようになった。行儀の悪いことである。そして、ある時、右手の小指と親指をくっつけることができないことに気付いた。試してみると、小指ばかりではなく、右手の指はどれもこれもまともに力が入らないことがわかった。

医者に診てもらおうことを決め、評判のいい整形外科医を紹介してもらった。その医者は手首や頸椎に問題があり、神経を圧迫しているのではないかと思っただけ。X線調べたが異常は見つからず、総合病院の神経内科を紹介してくれた。

総合病院では左右の腕の神経の反応検査や、MRIによる手首、頸椎そして脳の検査も行った。わかったことは、右腕の神経の反応が鈍いということであった。何故、反応が悪いのか、そこまでは分からず、別の総合病院の整形外科を紹介してくれた。

総合病院の整形外科でも、今までと同じような検査を繰り返したが、原因を突き止めることはできなかった。そして、脳神経の専門病院を紹介してくれた。その病院の院長は大学の後輩で、経済学部を卒業後、医学部に入学して医者になった男である。評判のいい病院なので、期待して出かけた。

その病院では、検査をいろいろ行わなければならないので入院してくれと言う。私の都合もあり、半月くらいたった九月九日に入院して検査が始まった。腕や脚の筋肉に針を刺し、電流を流す検査も行われた。そして九月十九日に検査結果を説明するので、家族に同席してほしい、と言ってきた。しかし、その日は妻も、東京の息子も都合がつかず、私が一人で説明を受けた。

右腕を切開して治療すれば、すぐ良くなる、とでも言われるものと気楽に構えていた。ところが、告げられた病名が筋萎縮性側索硬化症であった。それを聞かされても、どんな病気か理解できなかった。ただ、なぜそういう病気になったのかと質問をただけである。医者の説明を聞いて、ようやく理解できた。

医者は死の宣告にも近いことを言わなければならないので、家族の同席を求めたのかもしれない。私も若い時なら、大きなショックを受け、何とか死から逃れようと悩んだに違いない。しかし、古稀を過ぎた者にとって、死はさほどのことではなく、ショックはなかった。歳をとるにつれ、徐々に衰えを感じていたので、来るものが来たという感じであった。

今まで自由に使っていた右手が使いつらいので、どうしても左手を使うこと

になる。右手でやるような具合にはゆかず、ぎこちないことが多い。右腕も細くなり力が衰え、持続力がなくなっている。利き腕がだめになることがこんなにも不自由なこととは知らなかった。この先余命がどれほどなのか分からないが、新たに左を使う人生を始めようと思う。治療にあくせくする必要もないので、その分左手の使い方を開発してみようと思う。

こんなことを考えている時、会社時代の上司の奥様から本が届いた。『天国のキャディ』という本で、ゴルファーのトム・ワトソンと彼の専属キャディの友情の話である。このキャディがやはり若くしてこの病に罹りながらも、最後の最後までキャディを務める様子が書かれている。

彼に比べてみれば、今の私なんかは、まだ初期の段階にすぎない。彼は言葉をしゃべるにもろれつが回らなくなり、周囲の人々に理解してもらえない。彼の言葉を理解できるのは彼の妻とワトソンくらいになってしまう。

彼は徐々に歩くこともままならなくなって、カートに乗ってキャディを務めることもした。そして、筋肉が落ち、体重が落ち、ついには体力を失い、キャディができなくなってしまふ。そのころには、声も出なく言葉にならず、とうとう呼吸困難のため四十九歳でなくなってしまう。発病からわずか一年四カ月であった。

私の場合、いつが発病時期であったのか、自分ではわからない。特定疾患の申請書に添付する診断書に、発病時期が平成二十四年八月と書かれていた。それをもとにすれば発病後一年少々になるが、まださほど深刻な状態に至っていない。

症状の進行速度は違っても、私がこれから辿る道筋をこの本が示していることがわかった。したがって、その時々への対応の仕方を学ばなければならないと思った。闘病生活というが、この勝負は決まっているから、これは闘病ではなく、付き合いである。生活の中に、この病がもたらす様々な障害を組み込んでいかなければなるまい。その障害をかわし、だまし、なだめすかす工夫が必要になる。まさに知恵の使いどころである。そして意思の疎通が容易なうちに、お世話になった人たちにできるだけ多く会っておきたい。それが今、私が持っている数少ない願いである。

2013-10-26

【阿武隈川だより】

## 最初の言葉

渡辺 成典

郡山は鉄道の街である。2000人も働いていた工機部（郡山工場）には、市民会館を小さくしたような大食堂があった。ここで国鉄の採用試験を受け、郡山機関区という運転職場に配属されたのは昭和38年のことである。

D60やD51などの蒸気機関車が、たつぷりと水と石炭を詰めこんで発車を待つのもあれば、阿武隈や奥羽の峠を越えて真っ黒になりながら帰って来て、扇形の駐機場で体を休めたりしていた。

街の明かりも消えて寝静まっている深夜2時だというのに、高い鉄塔からの照明が闇をきりひらいて、広い構内を不夜城のように照らしていた。貨物列車が次々と到着する。それを方面別、駅別に組み替えする入換機関車がコマネズミのように動き回っていた。

なるほど、鉄道員の時間の見方は23時とか19時25分であり、午前とか午後とは言わないのも、鉄道は昼も夜もなく動き続けているからなのだろう。もはや戦後ではないと、急速に輸送量が伸びて、翌年には東海道新幹線の開業を迎える。

私は乗務員の登竜門である機関助士科の試験に受かり、仙台鉄道教習所で3ヵ月ほど学んだ。ここでは構造や運転理論、法規、異常時対応など専門的な知識に加えて、火床の模型に繰り返し投炭練習をさせられた。

その後に実乗務した、名俳優の田宮二郎に似た34歳の古参機関助士から教え導いてもらった。

今日は何もしないで、俺のやることをよーく見ておけ、と口火をきった。

「仙台で習ったのは機関車に関する理屈を頭で覚えてきただけだ。これからの3ヵ月間、しっかりと体に染みこませることになる。火傷ってわかるか。辞書で調べ教師の話聞くより、直接火傷してみろ、こんなに醜いもんだと体が覚える。それが実務見習いの基本だ。もう一つは、怪我と弁当は自分持ちだ。傷害事故には気をつけるんだぞ。」

私の初乗務は、郡山駅6番線から平（いわき）行の普通列車であった。発車2分前になると、石炭を続けざまに焚きこんで、ブロー（通風機）のノズルを捻ると黒煙がもうもうと立ち上がっていく。火床はいきり立ち蒸気圧の限界に達する赤い線に迫り、安全弁が吹出す寸前まで追い込んでいく。

発車30秒前が緊張のピーク、全神経を集中させる。郡山駅長代務の助役が、懐中時計を見て青い旗を振った。機関士は定時と大きな声で指をさし、もう一度前方の信号と通行手形であるタブレットを再確認して汽笛を鳴らした。蒸気溜めからシリンダーへ送ると蒸気が線路を切り裂くように流れ、大きな動輪がゆっくりと回り始めた。



逢瀬川の鉄橋を渡る頃には震度4ほどの激しい揺れに変わって、取っ手にしがみついてないと振り落とされそうになる。先生のスコップ捌きを見て驚いた。ペダルが開いた一瞬、薄く平らに焚口から放るのは手品師のような流麗さだった。機関車の揺れに調子を合わせるようにして腰を使い、1個の石炭の落ちこぼれもない。1500°Cの猛烈な火床は、カメラのフラッシュを焚かれたような閃光となって視界を奪い、目が慣れて外の景色が見えるまでしばらくかかった。騒音と埃それにトンネルでの黒煙で、終点の平駅に着くとおろし立ての白いタオルは灰色に変わっている。

休憩室での弁当も食べ終わり、湯飲み茶碗から口を離すと

「機関士の仕事は、事務屋さんのように消しゴムでは消せないんだ。あの時、間違っていました。今度から注意しますって言ったって、怪我や死亡事故なんて起こしたらどうしようもねー。それが責任の重さっていうもんだ。」

疑わしい時は手落ちなく考えて、最も安全なみちを採らねばならない。それは不断の修練によって築かれる、と国鉄綱領には書いてある。

勉強も努力もしないで漫然とやっていたんじゃ、泣きを見るのは自分自身だってことを、最初の心構えとして叩き込まれた。



## 思いつきで

藤原 昌子

京都へ行くことになった時、折角だから近辺を 2,3 日旅行したら面白かろうと城崎、天橋立を回ることにした。城崎は初めて、天橋立は学生時代に一度行っている。

城崎はかに解禁で駅前からの道には地方発送の札のたった海産物取り扱いの店がにぎわっていた。店の中でカニをゆでているのだがそのお湯が結構塩辛い。それ位濃くないと美味しく茹で上がらないとのことだが、保存のためもあるのだろう。

天橋立の駅コンコース内でパンフレットをもらい船の時間など聞きながら定番の観光、笠松公園の展望台へ上り何千年も経てできた自然の造形を眺めた。反対側の山にも新しく展望台ができてそちらの方が竜が舞うようで迫力があると聞いた。下に降りまた船に乗り駅まで引き返したが時間が中途半端でどうしたものかとパンフレットを眺めていると六ヶ所エリアが案内されていてその一つに由良とあった。もしかして、由良ってあの由良？

いつ頃のことか、絵をはっきり覚えているから絵本を見ていた頃だと思うが安寿と厨子王の話で 2 人が母と別の船に乗せられ騙されて人買いに連れて行かれたのが由良の港であったはず。絵本で想像するだけだった由良。心の底に眠っていたが行っておきたい土地であることに気づかされた。宿題みたいなもので是非この目で確かめねばと由良に急行。タクシーの運転手さんはあまり行く人もいませんね～という。

着いてみたら海岸すぐそばに整地されて森鷗外の碑が立てられていた。波は整地そばまで来て岩にあたり砕ける。ほど遠くないところにひときわ大きい平たい岩がありその上に小さな札があった。運転手さんは安寿が潮を汲んだ場所といわれているという。山椒大夫の屋敷は小高い丘の上らしい。晩秋の今でさえ波は荒く日本海の風は厳しい。真冬はどんなに過酷なことか。こんなところで潮を汲んで運んだというストーリーなのだ。道路の傍らに立つ安寿と厨子王の像が健気にみえる。像を見上げてこれは優しく強く聡明なお姉さんの話よとおしゃべりしていると身代わり菩薩を祀ってあるお寺にも行きますかと問われ二つ返事でそちらにも周ってもらった。

細い道を通り抜けて着いた如意寺の地藏堂に祀られていてこれは鎌倉時代の快慶の作とのこと。如意寺はひっそりしていてどなたもいらっしやらないよ

うだったので地蔵堂にお参りした。扉は閉まっいてお会いすることはかなわなかったが、普段より多めのお賽銭をして、心を込めてしばし手を合わせた。安寿と厨子王が額に焼き鑊を当てられた時その傷を引き受けられたというシーンにほっとしつつも不思議な気がしたのを思い出す。

あとはまたひたすら海岸線に沿って天橋立に引き返した。笠松公園と反対側のビューランドの展望台へ行くモノレール入口を通ったので上がってみた。やはり少し印象が違う。大きく生き生きして見えたのを確認してすぐ下山。モノレールの終了が早くて最終だった。降りてこられなかったらどうなるのか。知らない土地での思いつきの行動でせわしなく少々反省。



## サウディアラビア訪問記（1）

藤井 能成

1995 年以降、数回にわたってサウディアラビア王国を訪問する機会を得た。当時の外務大臣が同国を訪問した際に技術交流促進を約束し、KACST (King Abdulaziz City for Science & Technology、広大な敷地内に小学校から大学・研究機関まで擁する組織)と通産省(当時)傘下の石油産業活性化センター(PEC)との間でジョイントセミナーを開催することになった。そして、先方の関心が高かった分離膜と微生物技術の研究が取り上げられた。分離膜技術は、大規模な海水淡水化逆浸透膜装置の導入が世界で最も進んでいたのがサウディアラビアであり、また石油を採掘したあとの油井に水を圧入して残存する石油を取り出し、圧入した水の中の油分は膜で分離するという採掘技術が米国で研究されていたことが背景にあったと考えられる。微生物技術は石油を原料にして様々な物質がすでに合成されており、あるいは原油で汚染された土壌の浄化技術の研究が各地で進められていたからであろう。微生物技術については、石油系企業から研究者が派遣され共同研究が行われることになっていた。

PEC に参加する企業は当然のことながら殆どが石油関連の企業であった。多くの石油精製会社では、当時すでに、モンサント社(米国)が開発した水素分離膜装置をアンモニア合成プロセスの水素回収工程に導入していたが、膜技術の研究開発は行っていなかった。そこで、海水淡水化用逆浸透膜などの分離膜を開発・製造している企業に PEC から声がかかり、新たな研究プロジェクトが立ち上げられ、ジョイントセミナーに参加することになったのであった。しかしここで紹介したい話題は技術の話ではなくて、KACST の研究者や通訳をしてくれた人達、見学した大学や化学工場、街中で得た印象などである。私が初めて参加した第 2 回ジョイントセミナーの日程は 1995 年 1 月 22 日と 23 日で、出発予定は 1 月 19 日、成田からであった。中近東に旅行するのはこれが初めてなので多少緊張して準備を進めていたところ、1 月 17 日朝 5 時過ぎ、滋賀県大津市の古い木造社宅の床下から突き上げられるような衝撃とその直後の激しい地震動で目を覚ました。幸い地震による家具や家屋への大きな損害は無かったので、急いで研究室に出勤すると JR は不通で欠勤者が多く、社員の安否確認や大阪支店への救援隊の編成・派遣などで出張の準備どころではなかった。翌 18 日、成田空港からのフライトが 19 日の朝だったので、18 日の新幹線の運行予定を確かめようとしたが電話は通ぜず、関係者と連絡を取ることも出来なかった。しかし、同行する他社の研究者と昼前に電話が通じたので相談し、ともかく同日午後家を出てみることにした。すでに在来線は運行されていたので、家に戻り直ぐに荷物を持ってとりあえず京都

駅に向かうと、幸いにも地震で不通になってからの最初の京都発東京行の全席自由席となった「ひかり」に間に合い、夕刻成田空港にたどり着くことができた。

翌 19 日朝、新聞やテレビが報じる倒壊した高速道路や燃え上がる神戸市の惨状に思いを残しつつ、香港行きの便に乗った。香港空港で夕方のドバイ行きに乗換え、予定の現地時間 21:10 よりかなり遅れて到着した。航空会社が手配したホテルに行くためのトランジットで入国する手続きは、当時は、空港の 2 階待合室に登る階段の下で夜遅く行われ、我々全員のパスポートと手書きの預かり証 1 枚とを交換するというはなはだ不安なドバイ入国手続きであった。

翌 20 日、サウディアラビアへは 17 時過ぎの便でリヤドに入る予定なので、空港に戻るまでかなりの自由時間がある。旅慣れた PEC の担当者の案内でシャルジャーのセントラル・マーケット①に行き、ペルシャ絨毯の店や民芸品などの土産物の店を見て回った。ペルシャ絨毯の店は案内した人や日本人がしばしば訪れるようで、値段交渉も非常に親しげに和やかな雰囲気で行われた②。

離陸後リヤドに向かうサウディ航空の機内サービスにデザートと小さなカップに注がれたアラビアコーヒーが出て来た時、いよいよアラブの世界に来たのだという印象を強くした。リヤド空港は砂漠の中に建設された広大な近代的空港であった(③&④)。入国審査は非常に厳しく、最初の訪問では大使館からの出迎えのお陰であまり待たずに通されたが、2 回目以降は出迎えがなく一般の外国人と共にいつも最後になった。

礼拝の時間が近付くとチェックは通り一遍になり、審査を待つ人の列は一挙に消えた。旅行鞆は全て開いて検査され、時たま、中身を全部出されて調べられ、鞆を閉じるのに苦労する人もいた。アルコールや肌露わな女性の写真が載った雑誌、あるいは覚せい剤所持などが検査の対象であるという。

空港から市内に向かう道路脇に広い空き地が整備されていたが、これは巡礼シーズンに大潮の如く押し寄せる巡礼者のキャンプ地であるという。



リヤドではショッピングセンターも近くにあるヨーロッパスタイルのホテルがPEC関係の定宿になっていた⑤（右手のビル）。到着後、ロビーに入ると早速デーツとコーヒーで迎えられた。高々と左手に持った独特のポットから注いでくれたが、3回目の訪問時には頼まないとコーヒーを出さなくなっていた。



ホテルなのに部屋に入ると籠に入ったフルーツがテーブルに置いてあり、戸惑った。しかし添えられたメッセージから日本の旅館の茶菓子と同じ趣向であることが分かり、おやつ代わりに頂戴した。旅館の茶菓子と違うのは部屋に戻るとまた新しく追加されていたことである。



ホテルのボーイや受付の人達は非常に親日的で、ドアボーイは将来日本に行きたいので日本語を覚えていると言い、我々の送迎にはメモを見ながら片言の日本語で対応した。

ホテルや歓迎パーティーの食事は概して日本人の味覚にあうものであった。ホテルの朝食には新鮮な果物、フレッシュジュースやコーヒーなどと様々な種類のパン、チーズに、ベーコン、ソーセージなどもあった。勿論豚肉は使われている筈がないので聞いて見ると、馬肉などが使われているようで味も普通のベーコンやソーセージと変わらないと思った。パーティーでは香料が上手く効かされたクスクスやローストしたヒツジやトリなど大変美味であった。変わったものとしては1羽丸ごとローストした鳩料理があり、サウディの人達に好まれていた。

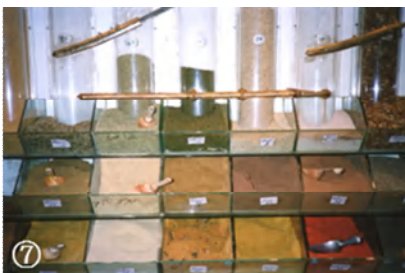
セミナーは、彼我の技術レベルの差と興味の違いで突っ込んだ議論はなかったが、交流を深めるといふ目的はある程度達成されたように思う。KACSTにはエジプトや近隣の国々出身の研究者がかなり居て、英国に留学し就職もした後に帰国してKACSTで働くようになった研究者もいた。我々から見て白人と区別できないような人でも、ヨーロッパで生活していると人種差別を感じるという。今の時代になっても、日露戦争で大国ロシアを打ち負かした日本はアジアの誇りであり、日本人を見習いたいと話していた。モスクで行われる説教などを通して「アルコール」や「アルカリ」などのアラビア語がヨーロッパの言語に取り入れられた歴史を含めて世界史を学んでいるようで、全盛期のアラビア文化への彼らの憧憬とプライドを感じた。礼拝の時間がくるとセミナーを中断して対応する人だけを残して休憩に入るのは聞いていた通りであった。



最初の訪問のときに通訳をしてくれた人は、日本の高校・大学を卒業し、米国の大学院に留学した後、母国の大学でコンピューター関連の研究をしている大変親日的な方であった。日本留学中、日本のメーカーの制電性布地の中東地区等のテレビ・コマーシャルにアルバイトで出ていたという。彼らは正式な場などで白またはベージュ或いは灰色の長いガウンのような伝統的な上着を着るが、乾燥した中近東の国々では静電気が発生するので、ポリエステルとレーヨンの混紡製品が好まれたのであろう。

予定された行事や移動の合間には、ホテルの近くのショッピングセンター（SC）を覗いてみた。SCは夜になると特に賑やかになる⑥。

SCには、リヤドのような内陸の都市にもかかわらず、ハタやナマズなどの魚類がエビやカニ等と共に氷の上に並べられていた。肉類や乳製品ではラクダの肉やミルクが普通に売られているのが珍しかった。2度目の訪問の時には生物化学の先生と一緒にであったが、彼はラクダのミルクの成分表をみてバランスが良いと言い、試飲してみようということになった。そこで1パック買って帰りホテルで試してみると大変飲み易いミルクであった。このことを通訳の人に話したら、ラクダのミルクは牛乳のように衛生的な環境で生産されているとは限らないので用心する必要があると注意された。



野菜や果物は近隣諸国から様々な種類が輸入され豊富に品揃えされていた。近年は紅海沿岸等でレタス等が栽培されているという。また、香料類⑦、ピクルス類、コーヒー、中東らしいお菓子類等が非常に豊富に並べられていた。アルコール類は禁じられているので勿論見かけないが、人前での喫煙が制約されるタバコに関しては水タバコの道具が何種類も置かれていた。アラビア語で表示した香料は使い道が分からないけれども、土産に買った胡椒は1kg入りの袋で売られていて非常に安価であったが大変香りがよかった。サフランも日常よく使われるためか1.5gや5g単位で売られていて驚くほど安い価格で売られていた。

## 「カルテット」とローマの老人ホーム

湯沢 雍彦

初夏の訪れを告げて汗ばむほどの暑さになった5月のある日、つれあいに誘われてイギリス映画「カルテット—人生のオペラハウス—」を観に行った。

監督は、「クレイマー・クレイマー」の父親役で日本人にも有名になったダスティ・ホフマンだったが、出演者は音楽会発表会場での司会役を務めた若い女優ただ一人を除いて、すべてが70代・80代の男女高齢者ばかりだった。しかしこの人達は、中高年の時にヨーロッパの劇場を熱狂させたクラシックのオペラの名歌手・名奏者ばかり。パンフレットの最終頁には、現在の写真と共に、壮年時代の写真も添えられている。みな年老いて一層貫禄が加わっている。

高齢になって身を寄せている老人ホーム「ビーチャム・ハウス」が経営難になってきたので、その危機を救おうとオペラの王様ともいべきジュセッペ・ヴェルディ生誕二百年の記念日に「合唱の夕べ」を開いたらという企画が持ち上がった。皆賛成して熱心な練習が始まり、オペラ「椿姫」の「乾杯の歌」や、「ミカド」の「学校帰りの三重唱」、「リゴレット」の「女心の歌」など有名な旋律がたくさん流れ出す。しかし、もう声が出ないという男性歌手や、昔の衣装が着られないから帰ると言い出す女性歌手も出てきて、監督はまとめるのが大変。

それでも、どうやら小さなホールに通路まで立ち尽くす人を集めて発表の日を迎え、四人の男女によるカルテット（四重唱「美しき恋の乙女よ」）が始まるところで映画は結ばれる。オペラ好きでない高齢者にも、励まされて元気になるようなドラマ映画になっている。

ところで私は、30年も前に（1984年6月）ローマの郊外にある似たような老人ホームを夫婦で訪ねたことを思い出した。本当はイタリア語に堪能な松浦千誉さん（のち拓殖大学教授）に案内していただく個人旅行の予定だったが、お母様のご不幸が起ったためにイタリア周遊の一般ツアーに加わることに変更し、私達だけその一日をさいて、イタリア大使館書記官の小塩ご夫妻のお世話でここを訪ねることになった。ジュセッペ・ヴェルディ自身も、自分が拠出してミラノに立てた「音楽家のための憩いの家」に眠っていることは有名だが、そのほかにローマには、映画・演劇人組合立の老人ホームが二つも出来ていたのである。

都心から北へ車で30分、そこは入居者300名も入る大施設だった。詳しく聞いてみると、60歳以上の健康な老人を、年金の半額を徴収して収容している。独身を通して身寄りがない人や、親子関係が悪い人も無論いるが、結婚した息子や娘の家族のために住まいを譲ってここに入った、というお年寄



りたちが一番多いそうである。ローマも住宅難なのである。夫婦入居も 20 組ほどいた。先進 5 カ国を比較した国際老人調査によると、老人が子どもたちと会う頻度はイタリアが一番多い。イタリア人は家族好きなのである。

最初の説明が長くて、退屈した男性運転手が入念に入れてくれたエスプレッソコーヒーは、さすがに本場の味でおいしかった。

説明役を務めてくれた老人ホームの栄養士は素敵な 20 代美人で、もう一押しすると個室に入居中の老女性に会わせてくれた。小型の安楽椅子に坐っていたが、「話よりこれを」といってまず机の上に飾っていた昔の写真の束を見せてくれた。小柄だが美人女優だったことがしのばれる全盛期の舞台写真ばかりだった。誰が来ても見せるそうである。私がついうっかり「お元気ですね。おいくつですか」と聞いたら、たちまち「女性に歳を聞くものではない」と怒られてしまった。外見からは 80 代なかばと思われ、廊下に出て皆と写真を撮ったときは栄養士に支えられていた。

帰り際、入口にある小ホールを振り返ると、男性老人 4 人が四隅に坐って顔も会わせていない。女性老人同士ならすぐ固まって話をするのに、世間話も出来ぬ男性老人のこの姿は、韓国や日本の老人ホームと同じだなと思いつつながら帰途についたことだった。

(2013 年 5 月 30 日記)



## 思い出のイスタンブール

昨年（2013）の5月、トルコ・イスタンブールの新市街中心地にある「タクシム広場」の映像が、何度もテレビニュースの画面に映し出された。大統領の都市政策に反対する市民の群れがデモを組んで何回も騒然としたからだ。（このことが、2020年オリンピック招致合戦で東京に敗れる原因につながった）広場が映るとそこに面した紫色の大きな「マルマラホテル」も映り、そこに7日間も連泊していた昔を思い出した。11年前の8月末から9月初めにかけてそこに居たのである。

一度も行ったことのないイスラムの国を見たいという素朴な願いからだが、ぐるぐると慌ただしく国中を回るよりも一カ所にステイしたほうが良い、とのつれの希望をいれて、そういうパックツアーを申し込んだ。

空港に安着して出口に出てみると、驚いたことに、このツアーの参加者は我々夫婦の二人だけだった。日本語が達者な現地ガイド・ウザンさんは、「予定表とは関係なく、お好みの所へご案内しますよ」と安心させてくれたので、チャンスなのかもしれないと思い直した。

ご承知のとおりこの町は、1453年の陥落まで「ビザンツ帝国（東ローマ帝国）」の首都コンスタンティノープルとして、1100年もの長い間栄耀栄華の時を刻み、その後の450年間もトルコ最大の都としてイスラム文化の中心となってきた所だから、見所にはこと欠かない。

いくつものモスク、トプカプ宮殿、軍事博物館、大バザールなどは定番だが、その他希望した市立図書館、離れ島、ロティの茶屋（ここで「お菊さん・のちの蝶々夫人」が書かれた）、アガサ・クリスティーが始発駅に近いところから「オリент急行殺人事件」を書いた古風で優雅なホテルなどにも案内してくれ、最終日にはマンションにある自宅にも行って、奥さんや娘さんにも紹介してくれた。

その他良いことは、道々の出来事を的確に説明してくれたことで、着飾った少年達が多いのは、明日の小学校入学を控えて、男子に必要な「割礼の儀式」を済ませた親子が、尊敬する予言者エル・エンサーリの墓へ行くところだという。このお墓は絶大なご利益があるようで、結婚式を済ませた新郎新婦も腕を組んで向って行ったし、前年ワールドカップで優勝したサッカーチームも、ここでお祈りして行ったから勝てたのだ、と市民はみな信じているとのこと。

困ったのは、パックに組まれているので避けられないと、宝石店とじゅうたん店に連れ込まれたこと。客は我々だけなので、何かを買わないと出してくれない。10人以上の店員と我々が長いこと対決する場になってしまった。

さてホテルでは、最初我々の部屋は広場側の 6 階だった。静かな公園と観光バスの並びは良く見えるが面白みに欠けるので、翌日から差額を条件に反対側の 12 階に替えてもらった。これは大当たりだった。

眼下に黒海まで続く「ボスフォラス海峡」が見え、実に様々な形の船が行き来する。これは半日見ても飽きない。幅は 1000 米もない狭さだが、ここが古来ヨーロッパとアジアの境目だという。対するアジア側東イスタンブールの世界初の赤十字病院などの名所もはっきり見える。ある日、入道雲がむくむくと盛り上がり、大窓一杯に広がる大雲になった。雷も派手に光って、これは大雨かと覚悟していたら、何事もなかった。ここでも雲は、西から東へ流れて行くのだ。

海峡の入口には、西に深く食い込む「金角湾」が見える。この幅 300 米もない狭い湾を巡って、ビザンツ帝国とオスマン・トルコとで激しい戦いが行われた様子は、塩野七生さんの『コンスタンティノーブルの陥落』（新潮文庫）に詳しい。旧市街は、さらに南を「マルマラ湾」に囲まれ、残る西の山地に堅固な三層の城壁を巡らせていたから、何度にもわたる侵攻に耐えて、永遠の都であり続けたのだ。

一週間の滞在を終えて清算の日、出された差額請求書の金額は「4541 万 3048 トルコリラ」とあった。一瞬跳び上がりそうになったが、ドルに換え、さらに日本円に換算すると「2 万 0200 円」に収まった。当時はすごいインフレだったのである。店の商人たちがみな厚い札束を握って商いをしている訳が、最後になってようやく納得できた（その後、新リラに換わったようだ）。

(2013・9・10)



## つくしくらぶ ―活動の経緯と理念―

我が国は、自国語の日本語によってほぼ全ての日常生活が完結され得る国です。それだけに来日した欧米ビジネスマンの多くにとって、国際都市東京に於いて英語がほとんど役に立たないことは大きな驚きであり、また自らは、“読めない、聞けない、書けない、話せない”の四重苦に陥る現実に愕然とします。日常生活やビジネスのやりとりの中で非常に異なった価値観、いわゆる 異文化の世界の中で途方にくれ、不本意な思いで帰国する事例が多くみられます。その背景には、歴史伝統からの文化慣習の差による 異文化の壁があります。

平成 11 年来、英語でコミュニケーションのできる家庭婦人達が集まり、業務で来日生活する外国人及び家族が遭遇する文化慣習の違いから生ずる諸問題の解決を目的として、「つくしくらぶ」の名で支援活動を行ってきました。

“つくしくらぶ”の名は、“(人に)尽くす”との意味を込め、同時に、雪解けの春の野に顔を出し“自ら伸びやかに育つ”土筆の姿を思い描いています。

異文化は、なにも国と国との間にだけあるものではありません。同じ国の中にも、個人どうしの中にもあります。文化はどちらが正しく、どちらが悪いというものではありません。それぞれの正しさを主張しあうところに紛争や憎しみが生じがちです。それゆえ、私どもは、お互いが相手との違いを理解し、その違いを尊重し合うことこそが、相互理解を可能にするとの考えで、これまで活動し、これからも活動してまいります。

これらの活動を明確に位置づけるため、内閣府に特定非営利活動法人としての設立申請を行い、平成 18 年 9 月 5 日、その認証(府国生第 859 号)を取得しました。

また、これを機会に、国内外のビジネスや技術開発など、長年業務に携わった経験豊富な方々の知恵や工夫をも活動に生かして行くこととしています。



江口春畝様 (会員)

平成 26 年 1 月 (第 8 卷 1 号) 貝坂倶楽部

発行所 NPO つくしくらぶ出版

102-0093 東京都千代田区隼町

2-12 藤和半蔵門コープ 801

email [tpine304@nifty.com](mailto:tpine304@nifty.com)

平成26年1月

新春のお慶びを申し上げます。

お寒い日々が続きますが、いかがお過ごしでいらっしゃいますか？

季刊誌貝塚倶楽部は 多くの方々のご協力のおかげで初版 2007 年春号より発行を重ねてまいりました。小冊子ではありますが 配布申し上げた皆様からご好評をいただいております。

このたび 2014 年新年号を発行いたしました。 お読みいただければ幸いです。

貝塚倶楽部冊子印刷版は会員、サポート会員、より良い活動のためご尽力をいただいている方々、また広報の一環として関係各位にお送りさせていただくことにしております。

(会員外でメールアドレスをいただいている方々に電子書籍ご希望の方々どうぞご連絡くださいませ。 [tpine304@nifty.com](mailto:tpine304@nifty.com) 高松)

ご感想、ご意見など頂けましたら幸いです。 また今後も沢山の方からのご寄稿をお待ちしております。

### 季刊誌ご投稿お願い

季刊誌を会員の皆様の発信冊子として 育てていきたいと願っています。日頃の思い、いろいろなご経験からのお考えなど是非お寄せ下さい。

#### 2014 年季刊誌の発行とご投稿時期の予定

春号	発行	4月	原稿〆切	3月15日
夏号		7月		6月15日
秋号		10月		9月15日
新年号		1月		12月15日

原稿をメールの添付でお送りくださいませ。B5サイズ2頁を目安にしてくださいましたら幸いです。(フォントはHGS ゴシックM の11サイズ) お送りいただいた原稿は当方での校正編集などはなく、そのまま掲載させていただきます。

## つくしくらぶニュースレター

会員、サポート会員の交流情報交換の場として冊子発行とともにお送りさせていただいております。皆様からのお便り、ご近況などお待ちしております。

### 1. 活動、イベントなどのお知らせ

#### 1 座談会 開催

**日時：2014年2月16日(日曜日)**

**午後1時半～3時半 (開場 1時)**

**会場：国際文化会館4階セミナー室404**

**お話：藤井能成氏 'イスラムの国・サウジアラビアの印象'**

大変眺めのよいお部屋でゆっくりとご歓談 いただけたらと企画いたしました。ご予定に入れていただければ幸いです。

**会費：会員 無料 (ゲスト：1000円)**

**2月8日までにご参加のお連絡を下記まで**

**メール(川村邦子：[k-kawa@k04.itscom.net](mailto:k-kawa@k04.itscom.net))**

#### 2 EIGONO研究会改め '英語で会話研究会'

日本人にとって一番苦手な '言いたいことをなんでも英語で言う'

'通じるための英語のリズムを会得する' のワークショップを予定しています。

ご希望の方には少人数でもいたしますので、お気軽にご連絡ください。

#### 3 会員の活動

マキ 心理教育相談室 代表 藤光純一郎

\* 東京砂漠の心のオアシスの一つとなればとの願いから開設した、民間の「こころの相談室」です。当相談室は心理カウンセラーのあつまりです。必要であれば、適切な医療機関にご紹介します。

予約制、お電話でご予約ください。 **電話番号：03-3223-5044** 月曜日から土曜日まで。

相談料：3000円から6000円/ 50分



## 活動報告:

### 文化プログラム

#### 1. 生け花:講師は滝井ひかるさん

今期も月一回集まって和やかな雰囲気の中、季節の花を活けていただきました。熱心に続けられてその課程を終えられ修了書を差し上げた方がお二人いらっしゃいます。

#### 2. 墨絵:講師は平本理子さん

寒くなるとともに子供たちの風邪のためメンバーの方も出席できなくなり今期は1回だけクラスがありました。葡萄は前に一度練習したことがあります。今回は大きな紙を使って葡萄棚の絵。迫力ある作品やエレガントなものなど個性豊かな作品が出来上がりました。

#### 3. ヒカリスクール:講師は滝井ひかるさん

秋から再開されました。前半はワークショップ、後半は煎茶のお点前。ワークショップではクリスマスやお正月が近いこともあってクリスマスツリーの飾りになるものやお正月飾りを作りました。



## ZADANKAI レポート (2013年11月10日)



スピーカーの MARI さんをご自分について次のように自己紹介してくださいました。



「33歳で、母であり教育修士と演劇教師です。2005年に卒業し来日するまで小学校で二年生（8歳の子供たち）の教師でした。」

（尚 MARI さんは、今年1月15日元気な男のお子さんをご出産になりました。）



第一部では PISA でトップクラスの学力を示したように世界に誇るフィンランドの教育についてお話させていただきました。

教育システムは右の図のようになっています。(英語でお話しましたがウェブから参照資料で要約させていただきます)

注目すべき点は

1. 就学前教育：0歳から5歳までを日本の保育所にあたるどころ、また家庭で。マリさんのお母様も5人のお子さんのお世話をしていたそうです。
2. 小学校入学前：日本の小学校一年にあたりますが、勉学が始まる前の準備の一年ということで義務ではない。
3. 16歳で基礎教育が終わり卒業となりますが、将来のための学力を考え更に一年最終学年を履修することができます。

4. 学費等：基礎教育の間はすべて無料。

それ以降は有料としては 教材、交通費、食費。

注目すべき点は、学費は無料で塾などはもちろん存在しない。

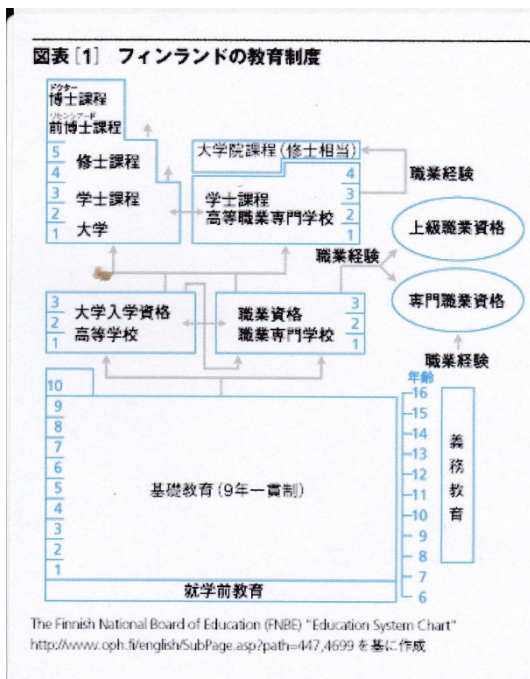
5. 私立の教育機関は無い。同じレベルである。ただ各学校によって特殊性は容認されている。

6. 成人教育、生涯教育

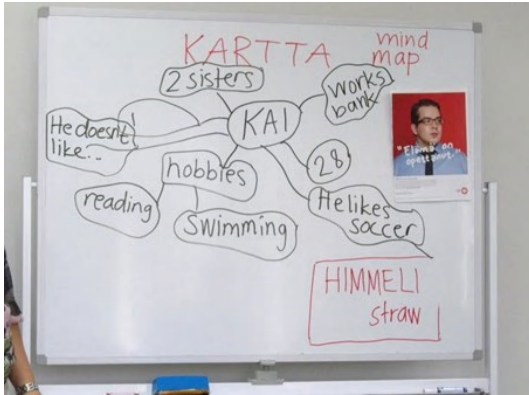
フィンランドでは教師に求められる教育学歴は大変高く、マリさんのご専門は基礎教育、演劇、そして特別児童教育（障がい児という意味ではなく、様々な理由でサポートを必要とする児童の教育）

次に実際の教育について

- \* 授業中先生が話すのは10分、できるだけ生徒が話すようにすべき
- \* 答えは一つと先生が決めつけない、生徒が考えるように、先生がクラスを指導する。  
クラスでもっとも使われる言葉が WHY,  
基本理念として： THINK before starting to write.



**KARTTA** というクラスメソッドを実際に参加者全員がしました。



数名のグループに分かれ、異なった写真を見ながら 自由に書き込んでいきます。

各グループでそれぞれ発表をします。先生は決して訂正をしたりせずに、更に深く広く考えるように WHY, HOW, WHAT と質問をします。

**TEA TIME** の後は第二部。 **HIMMELI** という藁をつかったデコレーションを全員で作りました。フィンランドの方々は大変手作業に優れているのだと思いますが、なかなか難しく、それだけに楽しい時間を過ごせました。今回は基礎を教えてくださいましたが、素晴らしい芸術品をつくるのができるのは作品



集を見て驚きました。  
(AMAZON で作り方の本を購入することができます。)



Mari-san、Paljon Kiitoksia 大変ありがとうございました。また次回に。

平成 26 年度(平成 26 年 6 月 1 日～平成 27 年 5 月 31 日)

サポート会員のご案内

年会費：2000 円

お振込み先：三菱東京UFJ 銀行

麹町中央支店 (普通) 1496570

特定非営利活動法人つくしくらぶ

NPO つくしくらぶ 事務局 (Email:[tpine304@nifty.com](mailto:tpine304@nifty.com))

URL: <http://www.npotsukushiclub.com>

## ZADANKAI のご案内

2014年 東京は穏やかな日々恵まれたお正月となりましたが、日ごとお寒くなってきております。いかがお過ごしでいらっしゃいますか？

今年度第一回の ZADANKAI を下記のように予定いたしました。ご多忙と存じますが、どうぞおでかけくださいませ。

日時： 2月16日（日曜日）

1時半～3時半 （1時開場）

会場： 国際文化会館 404 セミナー室

第一部 お話 藤井能成氏

第二部 TEA TIME の後 お話について座談会

### ‘イスラムの国・サウジアラビアの印象’

貝塚倶楽部新年号に藤井様がサウジアラビア訪問についてお書きいただきました。日本では西欧社会の記事に情報が偏りがちです。サウジアラビア訪問で見聞したことを通してイスラム社会の印象をお話しくださる貴重な機会をいただきました。

会費： 無料

藤井能成氏 一言プロフィール：化学系技術者、分離膜研究開発に従事



公益財団法人 国際文化会館

〒106 - 0032

東京都港区六本木 5 - 11 - 16

電話： 03-3470-4611

Fax： 03-3479-1738

URL: <http://www.i-house.or.jp/>

都営大江戸線 麻布十番駅 7番出口より徒歩 5分

東京メトロ南北線 麻布十番駅 4番出口より徒歩 8分

東京メトロ日比谷線 六本木駅 3番出口より徒歩 10分

お問い合わせ：09012535538 高松泰代





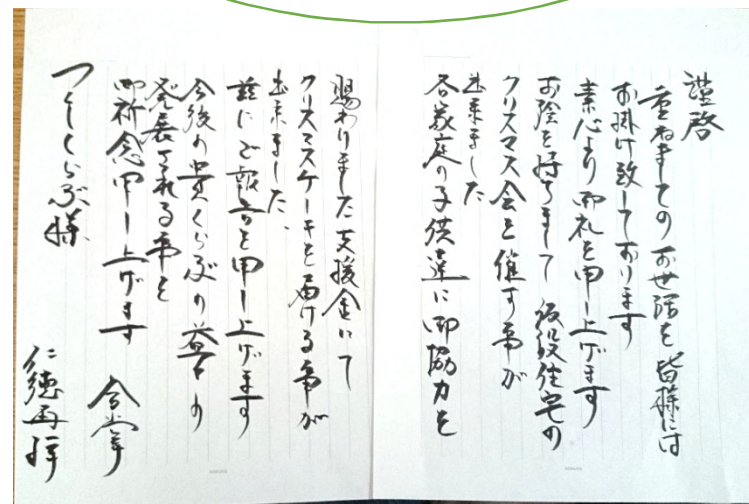
## 東松島のクリスマス！

GPの宝箱へのご参加ありがとうございます。

11月末に30万200円をお送りいたしました。

12月22日仮設住宅の子供のためのクリスマス会で、デコレーションケーキを八十名四十四世帯にお届けくださったとのお便りが写真とともに届きました。

—GPの宝箱世話人一同



### GPの宝箱

ゆうちょ銀行 口座番号：00190-0-359683

口座名称：特定非営利活動法人 つくしくらぶ

県内の集団移転事業は建築可能になった地区が計画全体の3%、区画整理事業は工事着工率が27%、自力再建が困難な被災者向けの災害公営住宅完成率は1%の状況、日々の生活に追われ貯えをなくしたり、集団移転先での職探しが難しいなどのため、当初希望した集団移転先での住宅再建をあきらめる被災者が出てきており、今後災害公営住宅入居者が増えるものとみられます。

### 【ようやくスタートライン】

弁護士事務所 地元出身の斎藤智（34）

震災がおきたとき、司法試験に合格し、仙台市内の事務所で働いていたときだった。東松島の実家は津波で全壊、祖父を亡くした。事務所への相談内容は依頼者が震災後の環境の変化に苦しみ法的な助けを求めてきた。「東松島に人が戻って復興するには、雇用を生む地場企業が元気になることが必要」

### 東松島みらいとし機構

環境未来都市の実現を目指す産官学民連携組織、復興を後押しする事業を本格化させている。医療法人社団が医療をツールとしたまちづくり、市有林の隣接地に新設される小学校で環境教育を進める「森の学校」

被災地は少子化高齢化や産業構造の再構築など、他地域では徐々におこることが一気に進んだ。今の東松島市は津波被害がなかった地域の10、20年後の姿で課題は全国共通。

ここで解決策を提示できれば、他の地域にも応用できる。東松島が経済、社会的に自立し、持続可能な地域になることが将来像。

### 地元業者が組合設立

被災者向けに整備する災害公営受託などの受注を目指し、市内の建設関連

業者が11月22日工務店共同組合を設立した。「地域の工務店としての強みはメンテナンスを含め見守り続けることにある。被災者に寄り添った形で事業を進め、市の復興につなげていく。」

### **被災文化財の保全**

毘沙門天立像は津波でばらばらになった。近隣の人が懸命に拾い集め、専門家に引き継いだ。崩壊寸前だった大徳寺の不道明王座像は、檀家らの篤信に支えられ再生した。地域の誇りを持ち続けてこそ成された奇跡の業である。

### **被災かんぼの宿活用**

津波で二階まで浸水し休業している鉄筋4階、7200平方。日本郵政から市が取得し、民間業者に運営をゆだねる方針。観光客の受け入れと震災伝承の機能を備える。

「周囲に高い建物がなく、施設が維持できれば万一のときも、安心。団体客が泊まれる施設は奥松島の観光振興につながる。」

### **かぐや姫一守り抜く**

かぐや姫は1993年、冷害で壊滅状態になった市内のササニキの水田で偶然発見された。上品な香りとほのかな甘みが特徴。木村正明（37）は市内の唯一の生産者。9割の被害をうけたが、水田の除塩などして11年作付けをした。今年11月約10トンの収穫。

「あんでなしょっぷ」「松島さかな市場」などで販売している。

竹取倶楽部：0225-82-4651